

うるし 漆

漆(うるし)は、日本古来の天然塗料であり、乾燥するとたいへん強い膜を作ります。漆が塗られている身近なものには、お椀や重箱等の漆器があります。漆器に塗られる漆液は、ウルシの木から樹液を採取し精製して作られます。

喜多方市では、ウルシの植栽・管理事業を行い良質のウルシ樹液を採取して、学校給食用の漆器に使用しています。林業総合センターでは、共通スペースの床に漆が塗られています。



漆塗の床

■ 漆の特徴

強い膜を作る	乾燥すると強い膜を作り、耐水性があるだけでなく、酸、アルカリ、アルコールなどの薬品にも耐える。
美しい塗り	一般の塗料は塗ったときから劣化していくが、漆の被膜は、年月が経つほどツヤを増し美しくなっていく。
長持ちする	紫外線に長期間あたらないければ、非常に長い期間品質を保つ。古い寺院などには今でも当時の漆塗りをされたものが多く残っている。
抗菌効果がある	最近の研究で漆に抗菌効果があることが明らかになっている。

■ ウルシ

ウルシ科の落葉高木。高さが10～15メートルになる。雌雄異株。秋には紅葉が美しい。樹皮をはぐと黄色の木肌が現れる。触ると強いかぶれを起こすことがある。

■ 喜多方市の漆栽培の取り組み

本市は、古くから会津漆器の産地として知られており、ウルシの栽培も盛んに行われていました。しかしながら、価格の安い中国産漆に押されて良質な会津産漆が激減したことから、昭和54年度より市がウルシの植栽・管理事業に取り組んでいます。平成8年度より、成長したウルシから漆の樹液を採取できるようになり、毎年「漆掻き(うるしかき)」を行い良質の「喜多方産漆」を産出しています。



市が管理する漆団地



漆掻き(うるしかき)

漆液を採取するには、ウルシの幹に傷を付けてそこからにじんできた樹液をへらですくい取ります。1回の作業でわずかな量しか採れず、大変な労力のかかる作業です。また、1本のウルシの木からは、牛乳瓶1本程度の漆の樹液しか採れないので、漆液はとても貴重な材料と言えます。